万博予定地で「カワツルモ」発見

6 月 20 日にレポートしたように、2025 年大阪・関西万博の会場予定地である大阪湾の人工島・夢洲で、絶滅危惧種に指定されている「コアジサシ」の繁殖活動が 2 年連続で確認された。朝日 6 月 30 日夕刊によると、夢洲で「準絶滅危惧」に分類されている水草「カワツルモ」が発見された。記事を抜粋して紹介したい。

大阪府では「絶滅」したとされる水草「カワツルモ」が、大阪市此花区の人工島・夢洲で見つかった。2025 年の大阪・関西万博予定地にできた水たまりに生えていた。水たまりは埋め立てられる計画で、研究者や自然保護団体は保全を求めている。

カワツルモの実＝大阪市立自然史博物館提供

カワツルモは、海水と淡水が混ざる汽水域の水中に生える多年草。環境省のレッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）では「準絶滅危惧」に分類されている。大阪市立自然史博物館が 20 年夏、夢洲の植物を調べていたところ、万博予定地の南東端にある水たまりの中に点々と生えているのが見つかった。水たまりの大きさは現在、長さ 30 ㍍、幅 10 ㍍。海水に雨水が混じって塩分濃度が下がったようだ。

カワツルモは大阪府内では 1960 年代まで泉南市で見られたが開発で姿を消した。96 年に咲洲に打ち上げられて以降は確認されず、大阪府は 2014 年、府のレッドリストを改訂した際、大阪府で「絶滅」とした。水草や湿地の植物に詳しい角野康郎・神戸大学名誉教授は「全国的に海岸が次々と開発され、近畿地方では大阪湾岸、瀬戸内海全体でもほとんど残っていない。夢洲での生育の希少性は間違いない」と話す。カワツルモが生えていた水たまりの脇の湿地にはヨシ原もある。水鳥が飛来し、昆虫や甲殻類の生育環境になる。角野さんは「ヨシ原は湿地の生物多様性を高める」。

カワツルモの発見を踏まえ、大阪自然環境保全協会と、自然環境の研究者らでつくる関西自然保護機構は、国際博覧会協会や、大阪市などに、カワツルモやヨシ原のある水辺の保全を要望した。大阪港湾局は昨年 8 月、こうした要望を機にカワツルモの生息を把握。だが、工事は予定通り進め、水たまりも埋め立てる方針だ。開発調整課の松田克仁課長代理は「周辺の地盤は泥状のため、万博やその後の国際観光拠点整備に向けた地盤の改良が必要と判断した」と話す。カワツルモの保全については「移植ができるかなど、専門家と相談して対応を検討する」としている。

2005 年愛知万博でも、オオタカやシデコブシなどの保全が課題となり、会場変更につながった。大阪万博会場予定地の夢洲も、大阪湾の貴重な生態系の保全が注目される。環境アセスメント「準備書」に向けて、きめ細かな調査と環境影響評価が求められる。

（2021 年 7 月 3 日）